

視点3

探求と「ひたすら遊ぶ」は同じこと

菅本晶夫

(大学教員)

広辞苑を開くと、「探求」とは「ある物事をあくまでさがし求めようとする事。」とあり、真面目な取り組みとの印象を受ける。一方、「遊び」とは、①遊戯②猟や音楽のなぐさみ③遊興 特に、酒色や賭博をいう④あそびめ⑤仕事や勉強の合間⑥人生から遊離した美の世界を求めること⑦気持のゆとり⑧「機械工学」例「ハンドルの遊び」―などとあり、「暇なときに楽しむものであり、気持ちにゆとりがあることも逆にのめり込むこともある余技」といった印象を受ける。

広辞苑の記述は一般成人向けのものだが、子どもたちや科学者の「遊び」とは少し違う。

私は自然科学者であるので、子どもたちと同じように日々「ひたすら遊ぶこと」に徹している。なぜなら「ひたすら遊ぶこと」が自然の真理を探求する一番の早道だからである。

自然科学者の私は、自然の根本原理を知りたいと考えて、それを探し求めようとするが、そもそも物事の本質あるいは根本原理はどのようなにして明らかになるものなのだろうか。もちろん、探し求めたい対象があれば、それについてこれまで知られている事実をできる限り数多く理解しておく必要がある。そのためには忍耐と努力が必要であるが、いくら事

菅本晶夫 (すがもとあきお)

お茶の水女子大学名誉教授。放送大学客員教授。専門：素粒子論。著書：『対称性の自発的破れ』（共著、サイエンス社）。

趣味：酒、バイオリン、附属小保護者とコーラス、書道、落語等。

実を数多く学んだとしても、いくら涙ぐましい努力を重ねたとしても、新しい原理の発見に至ることはまれではないだろうか。

発見というものは、誠実な心をもって真摯しんしに、あらゆる苦勞に耐えながら、あらゆる努力を積み重ねれば得られるのだろうか。私は若い頃そう思っていた。しかしいくら努力しても、もちろん努力が足りなかったのだろうが、何も新しい発見は得られなかった。それで自分の人間性と考え方に問題があると考えて、「悟り」とは何かを探求し始めた。二十代半ばのことである。しかしながらどんな書物を読んでも「悟りとは何か」の具体的なことは一切書かれていなかった。人生の根本課題であるにもかかわらず、なぜ書かれていないのか不思議でならなかった。日本語の所為だと考えて、鈴木大拙の英文 *Zen Buddhism* のページをめくってみた。正確には覚えていないがそこに、昔の人の話として、「普通の日常

生活が悟りである」と書かれていた。「一瞬「あれっ」と思ったが理解できず、そのまま放置した。すでに三十歳を過ぎていた。

ところが三十代の終わりになって、眼の治療で入院することになった。そのとき、紀野一義の講演を録音したCDを義兄が差し入れてくれた。道元の「正法眼蔵」に関する講演であった。とても興味を持った。退院後、「正法眼蔵」の最初の巻「現成公案」を通勤の行き帰りに毎日読み続けた。「悟り」とはすでに存在する。それは宇宙の根本原理であって、あらゆる所に存在する。「その存在に気付く」ことが「悟り」である。しかし「自分から動いて真理を求めようとするのは迷いであり、真理のほうから動いて自分の中に飛び込んで来るのが悟りである」と美しい日本語で書かれていた。この巻の最後に、「風を手に入れたければ扇であおぐ必要がある」とも書かれていた。自分がわかることは限られている。従って、己を知りたければ己を忘れよという。

ようやく「悟りとは何か」がおぼろげながらにわかったが、そのときすでに四十歳になっていた。その後は一切悩むことなく、この考えに従って生きてきた。五十代の終わりから三年間、大学の附属小学校校長を務められたのだから、恐らくこの考えはそれほど間違っていないのではないだろうか。

これを探求に当てはめてみよう。探し求めたい対象は何であってもよいが、たとえそれが「自然の根本原理」であるとしても、その対象はすでに存在している。それを発見して自分のものにしたいのだが、自分から動いて求めてはいけない。真理の側が動いて自分の体に飛び込んで来るのを、己を忘れてひたすら待つのである。もちろん、真理を呼び寄せる小さな働き掛けくらい（扇を使うくらい、これまで知られていることを少し理解するくらい）はしなければならぬ。

この「成果を積極的に求めず、己を忘れて

ひたすら真理が自分の体に飛び込むのを待つ」心理状態は、子どもたちが「遊びに夢中になる」ときの心理状態と同じである。何か面白いことがありそうだというので、ひたすら楽しそうに遊ぶ。もちろん成果など期待しないが、時々新しい発見が体に飛び込んで来る。この小さな成功体験の感触が得られれば、面白くてたまらなくなつて、遊びに病みつきになる。その意味で遊びには③賭博性がある。

研究も同じである。毎日毎日、楽しくお絵描き（すなわち研究）を続ける。絵を描くといつても数式を書いているかもしれないし、どんな絵を描くかは自由であり、人それぞれに異なるだろう。ただひたすら、成果を求めず、真理を発見したいという当初の目標も忘れ、己も忘れてひたすら楽しく遊び続ける。これを毎日毎日続けていると、真理を受け入れられる体に体質改善する。そうしたらしめたものである。真理を受容できる体には、やがて真理が自ら到来するのである。このとき、

楽しく遊ぶことが重要である。楽しさを感じると心に余裕ができて柔軟に真理を受け入れることができる。なぜ上記のようになるのかというと、悟りも探求も遊びも、人知を超えた営みだからである。

老母に孔子は「吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順^{した}う。七十にして心の欲する所に従つて、矩^{のり}を踰^こえず」と言つて七十代半ばで亡くなつたが、八十、九十はどんな心境かと問うたところ「ひたすら遊ぶ。八十は現世と遊び、九十は来世と遊ぶ」と答えた。十五以下は聞かなかつたが、もちろん「ひたすら遊ぶ」であろう。遊びの中からすべてが現れる。真理もそうだし、思いやりの心も、自然と人間に対する感動も現れる。すべては遊びにあり、その中から人はさまざまなることを学んで成長する。従つて、人の一生において一番重要なことは「ひたすら遊ぶ」

ことである。この営みを子どもや老人だけにさせておくのはもつたない。大人こそ率先して大いに遊ばなければならぬ。「成果が得られない」という人がいれば、「ひたすらわれを忘れて遊んでいないからだ」と答えた。遊びとは、自然と人間の活動を探求することであり、極めて高度な人間の営みである。

最後に、探求や遊ぶ際の人とのかわり方について補足する。人とのコミュニケーションはとても重要であり、さまざまな人が関与すると、探求や遊びに幅ができる。しかしながら、探求や遊びを深めるには、独り静かに振り返る時間を持つべきである。すなわち「アトリエ」と「サロン」を行き来する必要がある。「アトリエ」にこもつて自分と向き合う静かな時間と、「サロン」で大勢の人と楽しく意見を交わす時間とを交互に持ちたいと思う。そうすると、より真理を受容しやすい体質になるだろう。